校長室だより～燦燦～ №５９０

やり続ける人

2022.7.25

「やりたい人１００人、やる人１０人、やり続ける人１人」という言葉を知った。確かにそのくらいの割合のような気がする。「したい人１００００人、始める人１００人、続ける人１人」という言葉もある。１００００人よりは１００人の方がイメージしやすいので、そちらで考えてみる。

私のまわりにもやり続ける人がいる。教員になって初めてやり続ける人に出会ったのは、初任校だった。６年生の担任の先生だった。毎日、手書きの学級通信を出していた。すごいと思った。とても真似できないと思った。どうやっているんだという疑問しかなかった。自分も学級通信を出すようになり、改めてその先生のすごさを思い知らされた。

ソフトテニスでは、教員になり顧問を務めるようになってからソフトテニスを始めた先生がいる。よく生徒と試合をしていた。そのうち、一般の大会にも出るようになった。さすがに上位には入らない。それでも毎年大会に出ていた。

その先生に聞いたことがある。「どうして先生はずっと大会に出ているんですか」その先生が言うには、「ずっと出ていればいつかは優勝できるかと思って」その先生が退職を迎えた。時間に余裕ができたのか、さらに力が入ってきた。相変わらず大会にも出ている。成績はというと、以前よりも上がってきている。そのうち本当に優勝するのかもしれない。やり続けるエネルギーがすごい。

ソフトテニスの指導者にもすごい人がいる。もう何年も小学生や中学生、高校生の指導を続けている。あの衰えぬ情熱はどこからくるのだろうと思う。とても真似できない。高校生の指導をずっと続けている人もすごい。第一線で何年もの間続けているのである。誰にでもできることではない。

学級通信にせよソフトテニスの選手、指導者にせよ、共通していることは、頼まれてやっているわけではない点である。やらなければやらないで済む。にもかかわらず、自分から自分の意思でやり続けているのである。そこに価値がある。やらなくてもいいことをやることに意義がある。

やり続ける人には、人としての魅力がある。人間力である。では、自分はというと、トップギアの状態でずっとやり続けていることなどあろうか。その時期、その時期でひたむきな情熱を傾けたものはある。それでもせいぜい１５年程度である。やり続ける人のスパンは３０年以上である。積み上げてきたものが違う。

３０年もの間、やり続けているものはないが、いつも何かにはひたむきになっているように思う。続けられないのは、とことんのめり込むということができない性格が出ているのだろう。だが、常に何かはやっていたいという自分がいる。

自分はやりたい人の１人である。その時期によっては、やる人の１人にもなった。しかし、やり続ける人にはなれなかった。だから、やり続ける人はすごいと思う。トップギアで３０年とは言えないが、何らかの形で文章を書くことは続けている。今は、これを続けることが自分にできることである。